
遊曲の直線 Boundary of the deceased and there

鳴谷駿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊曲の直線 Boundary of the decrease
and there

【Nコード】

N1696L

【作者名】

鳴谷駿

【あらすじ】

世界は多くの境界に満ちている、大学生磨姫路 嬉々ハルハル也ヤはある日境界の向こうを知る。知ること広がる世界、連続猟奇殺人、彷徨う虚、奇怪は彼らをどこへ導くのか・

12月5日、祝・500PV!!!!!!

個人的にはすごく嬉しかったです。

二章執筆中……目指せ年内投稿><。

序章 遊曲の直線

序章 遊曲ユウキョクの直線

この直線はどこまで続いているのだろうか？

- 始まりもなく -

廻り道をこの直線はつなぐ 真っ直ぐに

- 終わりもなく -

遊び 戯れ 割り この直線は続き 果てに向かう・・・

- -

.....
.....
.....

この道には君にはどう見える？

- 真っ直ぐな直線 - - それは君が知らないからさ -

私にはどう見えるか？

- 醜く曲がった直線さ -

それは直線とは言わない？

- 君が正解だよ -

でも、その正解に何の意味があるんだい？

.....

遊曲の直線

登場人物

磨姫路 まぎろ 嬉々也 きぎや

本作の主人公。大学に通う学生、容姿は普通、体格なども標準的である。

両親は幼い頃に亡くなっており、妹が一人いる。

伯 はく

嬉々也のアルバイト先の遊夕堂の従業員。年齢、経歴すべて不明。

六夜さん むくよ

嬉々也のアルバイト先の遊夕堂の店主。骨董品屋である遊夕堂の店主であり、様々なことに精通している。容姿は艶やかであり、気品をどこかに感じさせる。年齢は容姿から推測は出来ない。

迎戸 むかいど 忠人 ただひと

中年の刑事。人間に対する観察力に優れたベテラン刑事。今回の連続殺人事件を捜査している。

上邊 うわべ 達也 たつや

検死官。迎戸の同僚。

第一章 解体屋

連続殺人犯の呼び名。半年前から続くバラバラ殺人事件の犯人。

第一章 混念徘徊（前書き）

こんにちは。

私自身の二作目になります。

まだまだ未熟者ですが、今の自分の表現力を出し切った作品です。よろしければ最後までお付き合いください。

第一章 混念徘徊

第一章 こんねんはいかい 混念徘徊

） 混念徘徊 1 / 4 ）

月明かりが小さな窓から差込む薄暗い部屋で何かは動いていた・

・

「見ての通り奴です、これで四人目です。」

鑑識の男が中年の刑事を見て言った。中年の刑事はただ眺めていた、部屋中に飛び散った血液、人の形をしていない死体、こんな光景を見るのはこれで四回目だった。

「こいつは何を考えているんだか、いやこいつらはか……」

いつも通りの朝だった。大学に行く為に起き、少し時間に余裕があったから朝食を取りながらTVをつけていた。たまたまニュースがやっていた、普段から朝テレビを見ないからか、画面から流れるニュースに新鮮さがあり、朝食を取りながら目を向けていた。

「これで四人目の犠牲者です……」

「四人か」

世間はとある事件の話題で持ちきりだ。

解体魔、解体屋……

多くの呼び方を持つ殺人鬼が多くのメディアの注目を集めていた。最初の事件は半年ほど前になる、一人の男の遺体が見つかった。普段の殺人事件と同じように処理されるはずだった。しかし、とある掲示板に事件現場の画像が流出した。まさにバラバラ、この画像が事件を変えた。明らかな猟奇殺人、そして事件は続いた。

TVから流れる専門家の意見は退屈だ、犯人の精神状態？宗教的？

「こいつは何も考えてないよ」
俺はTVを消して朝食を終えいつも通り大学に向かった。

大学の授業中に着信があった、高校の友人からの連絡だった。高校時代の二つ上の先輩が亡くなったらしい、その通夜についての連絡だった。最初にそのことを聞いた時は特に興味はなかった。正直な所、先輩の顔はぼんやりと思いつけるが特別深い仲ではなかった人だった。名前もすっかりと思いつけなかったし、だからついさっきこの名を聞いたことをすぐに思いつけなかったのかもしれない。

薄暗い部屋の中に一つだけ明かりの点いた机に中年の刑事がいた、男は鑑識の報告結果を見ながら、深くタバコの煙を吸い込んだ。この刑事はこの事件に一件目から関わっていた、前代未聞のこの事件にはすでに対策本部が出来ていた。しかし、本庁から派遣された奴の計らいで俺達も捜査を継続させてもらっている。

「こいつは何人なんだ・・・」

刑事は鑑識記録を見直して、額に皺をよせていた。鑑識を見る限りでは同じ人物の犯行のように思える、しかし決定的な違いがあった。こいつは毎回癖が違う、どんな犯罪者も必ず癖がある。殺し方、場所、時間・・・そのすべてに全くの習性が見られない。だから警察は何も動けない、手がかりがないのだ。

「むいかど迎戸」

後からカップ麺を食べながら一人の男が話しかけてきた。

「上うわく邊か、あれだけのモノを見てよく食べれるな」

上邊と呼ばれた男は近くの椅子を引き寄せ座った。

「どうだ、犯人の目星はついたか？」

「それなら、こんな机に張り付いてやしないよ」

上邊は大きく頷き麺を口に一気に含んだ。

「で、何のようだよ？お前から来るってことは何か思い当たることがあったのだろ」

「実はな、凶器のことだ」

「凶器？」

「ああ、上は必ず何かの凶器があると考えている。だから俺達は毎晩徹夜で必死さ、だからな、調べるほどに答えが分からなくなっていくんだよ」

「どういうことだ？」

上邊は三人目と四人目の被害者を指差した。

「この二人は素手で殺されている」

迎戸は啞然としていた。

「引きちぎった様な痕があつたんだよ」

「引きちぎる……」

タバコの煙が二人の間を流れ静かに消えていく……

仕方のないことだった、血に染まる床、動かない塊、ただそれを見て微笑む姿。振り下ろされる凶器と共に飛び散る赤、塊は片と化する。

「僕はまだ終われない。やらなくちゃ、まだこんな所で終わってはいはずはないんだ。だから神様は僕にチャンスをくれたんだ」

血に染まった姿で男は繰り返す、解体作業をただただ……

結局、通夜には行かなかつた。しかし数日後、たまたま高校の友人に会った。

「先輩、解体屋に殺されたんだぜ。まさか知り合いから犠牲者がでるなんてさ、何か今までは他人事だったけど急に怖くなったよ」

「確かにそうかもな」

俺の反応に友人は少し不思議そうな顔で俺を見ていた、俺は特に気にすることなく適当に話を続けて友達と別れた。

最近の大学生の経済状況は皆さんご存知だろう、生きていくのに

は金がかかる。だから多くの大学生はアルバイトをしている、おれ自身も例外ではなく働いている。暫くの間、大学のレポートやらで忙しくて顔を出すことが出来なかった。

「こんちわー」

俺はいつも通りこの古びた骨董品屋遊夕堂ゆせいたうに入った。店の中は薄暗く色々な物が無作為に置かれている、この店は駅から少し離れており殆ど客が来ることはない。と言うか、気付くことも出来ない店だ。

「六夜むくよさん、居ますか？」

ひと気のない店に俺の声が響いた、そして店の奥から声が返ってきた。

「いるよー、ちゃんと買ってきたかい？」

「一番新鮮なのを選んできましたよ」

俺は店の奥へ歩いて行った、そこには青く光る大きな水槽が一つあった。水族館でしか見たことない様な大きな水槽の中にそれはいる、青く怪しく光る目をした大きな魚が静かに姿を現す。

「元気そうですね」

「お前さんが中々来ないから、魚の餌は食べ飽きた」

「すいません、大学が忙しくて。暫くはちょこちょこ来られますから」

「で、例のモノを早く、早く」

俺はスーパ一の袋から生の海老を取り出し、水槽の中へ入れた。大きな魚は嬉しそうにそれに食らいつく、あまり見えていて気持ちいいものではないが、魚であっても喜んでいることは良く分かった。買って来た海老を食べ終えると大きな魚は水槽の底へと体を下ろし話始める。

「お前さんが来ないから、もう五人だよ」

普段通り大きな魚は話しかけてくる。この大きな魚が六夜さん、この店の主で俺の雇い主。この人？この魚の話をするとう長くなるので今回は省略、一つ言えるのはこの姿は仮の姿でちゃんと人間の形を

していることもあるらしい。ただし俺はこの姿しか見たことがないので本当かどうかは知らないけど……。

「解体屋でしたっけ？俺は四人までしか知らないですけど」

「昨晚また一人殺られたよ、まだ現場に行つてないからそいつかどうか分からないけどね」

俺は話をしながら店の中を見渡した。

「伯はくの奴は？」

「伯ならその辺で寝ているだろ」

俺はもう一度店を見渡した、店の隅にある古い大きなソファの上に微かに動く者が見えた。ちらちらと見えていた銀色が黒い毛布に覆われた。

「伯、寝てばかりいないでそろそろ起きてくれ。仕事だよ」

水槽で寛ぐ魚が言つと、どうも説得力に欠けるように思えるのは俺だけではないはずだ。黒い毛布に覆われたものは静かに起き上がった。銀色の綺麗な髪を振り女は猫のように眠い目をこすり俺達を見つめる。

「嬉おどろ々おどろ也ちか……」

女はそう言つて長い綺麗な自身の髪を上手に枕のようにして眠りについた。

「六夜さん、伯の奴また寝ちゃいましたよ」

「……」

六夜さんは俺をじつと見つめていた。

「わかりました」

俺は伯に近づき別の人に言つるように言い始めた。

「あーあ、せっかく新しい味出たのになーあ。新商品もたくさん買つてきたのに」

伯はそーっと俺のことを見ている、俺は目線を合わせずにスーパーの袋からスナック菓子を出して開けようとした。

「待て」

艶やかで気品のある小さな声が聞こえてきた。俺は気にすることな

くスナック菓子を開けて食べようとする。

「待ってって言ってるだろ」

さっきより少し大きな声が聞こえた。俺はそれでもスナック菓子を口に運ぼうとした。寝ていたはずのものは俊敏に動き俺の手からスナック菓子の袋とスーパリーの袋を奪った。

「ユツケ風味か、科学の進歩と言うものは常に私の想像の先に行く」
伯はソファアの上に胡坐をかき、スナック菓子を頬張る。この女が伯、俺と同じこの店の従業員である。俺よりも長くこの店に勤めている。普段は寝ていることが多く、俺が知っている限り好きなものはお菓子くらいだ。見た目は俺と同じ年位だがえらく落ち着いている、普通にしていれば間違えなく美人であろう。俺も最初見た時は目を奪われた、長く美しい銀色の髪に端整な顔立ちは人を魅了するには十分すぎる代物だ。

「伯、ちよつと嬉々と一緒に出かけて来てくれ」

奥の水槽から声が聞こえた。伯はスナック菓子を食べながら立ち上がり、自身の臭いをかいで言った。

「わかった」

そう言っただけ俺を見てきた。俺はボサボサの髪を手で整える伯を見て言った。

「風呂に入ってきてくれ」

伯は気だるそうに返事をして風呂へ向かった。

俺は伯が風呂に入っている間に水槽の掃除などの仕事を済ませ、ソファアで売り物の本を読んでいた。

「目がようやく覚めた、覚めた」

伯が裸同然の姿で風呂から出てきた、一応異性である俺を気にすることなく服を着始める。正直な話、嬉しくも悲しくも感じている自分が居る。伯は多少体の凹凸で者足りぬ所もあるが、十分なほど魅力的だ。白く美しい肌にすらりとした体は、本来こんな所で埃をかぶっているべき代物ではない。うちの大学にいたら間違えなくミス・

キャンであろう。

「嬉々、少しは自重しろ。私の体が魅力的なのは十分に自覚している、だがチラチラ見るとか指の間から見るとかしてくれるか」

俺は思わぬ指摘？いや気付かれていたことに顔を赤くしていた。伯は嬉しそうに俺を見て笑っていた。

「だから、ガキは困る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は何も言い返さず、伯の方から視線を逸らし本に目を向けた。暫くして伯の準備が出来た。黒地に赤の刺繍が施されたボレロに長い銀髪を結わいた姿は、綺麗でどこか凛々しい。外出の時は伯の服装はいつもきちんとしている、どこで手に入れてくるのか上品でどれも上質な物ばかりだ。

「さあ行くぞ、嬉々」

「ああ」

） 混念徘徊 2 / 4 （

俺は伯と二つの事件現場へ向かった。最初に昨晚起きた五人目の現場へと向かった。車での運転中、助手席に座る伯は退屈そうに外の風景を眺めていた。俺も少しは話かけたがあまり会話が続くことはなかった。

「今回の奴はやっぱり境界の向こう側の奴なのか？」

伯はそのまま外の風景に目を向けたまま言った。

「今はどうか分からないが、二人目まではまだ越えていなかった。だから六夜は動かなかった」

「どんな奴だと思う？」

伯は何も言わず俺を見て、また外へ視線を向けた。

「なんだよ」

俺達は車から現場の廃ビルを見ていた、周辺には複数の警官達が

いた。多くの報道人が現場の状況などを話している。伯は車から降りることなく廃ビルを見ていた。

「何か聞こえるか？」

伯は俺に尋ねた。俺はさっきから聞こえるこの騒がしさをありのまま伝えた。

「騒がしな、色々な声？が聞こえるよ」

「こいつは違う、次に行こう」

俺は伯の言ったことに従ってペダルに足を置いた。俺にはまだこう言う事件のことはよく分からない。だから、俺に違和感があっても、伯の判断を否定することも何も出来ない。所詮俺は境界の内側の人間で、外のことは知っていることしか見えないし、触れられるかも分からない。ペダルを踏み込もうとした時、車のガラスを叩かれた。「ひさしぶりだね、磨姫路まきろくん」
ガラスの向こうには中年の男が立っていた。

「迎戸さん、久しぶりです」

この男は刑事だ、以前お世話になったことがあって面識がある。

「もう大丈夫かい？」

「はい、おかげさまで」

迎戸さんは怖い、彼の目はいつも笑っていない。相手の動きを注意深く観察している、今も俺をじっとその目が捕らえている。

「それは良かった。今日はえらいべっぴんさんを連れてくるね、羨ましいよ」

迎戸さんは伯をいつもの目で笑いながら見ていた。伯は嫌そうに会釈をした。俺は伯がこの人を嫌いなのがすぐに分かった、だからすぐにこの場を離れることを決めた。

「そんな、ただのバイトの先輩ですよ。仕事中にわざわざ声をかけてもらってすいません。それではまた、お仕事頑張ってください」
俺はそのまま車を進めた。迎戸さんは笑顔で俺達の車を見送っていたが、確実に何かを疑っていた。

そのまま車で次の現場に向かったが、伯がすぐに「ここはあいつだ」

とだけ言つてすぐにその場を後にした。

俺達は遊夕堂に戻つた。俺は六夜さんに、4人目の被害者の母親が犯人を目撃しているらしいから話を聞いて来いと言われ、俺は病院の前にいる。このバイトは給料がえらくいい、その辺の学生が聞いたら目を疑うような額を貰っている。それにシフトも自由だし、たぶん頼めば食費や交通費も出してくれると思う。伯によれば六夜さんは初めてバイトを雇つたらしい、だから相場も分からずえらく羽振りもよい。それもあつてか俺は基本的に六夜さんには忠実だ、大抵の頼みは引き受ける。

この病院に来るのは半年ぶりだろうか、あの時以来、俺は普通の人間が聞こえない声はつきりと聞こえるようになった。だから仕事以外ではこう言う場所に近づかない、声の主もこつちが特別意識しなければ特に何かしてくる訳ではないが、でもあまり気分のいいことではない。

病室に向かう途中に多くの声が聞こえた。俺はそれらを気にすることなく歩いていると、目的の病室のある階で視線を感じた、俺はその視線のある方に目を向けると少女がいた。真っ白な病室に一人で窓際のベッドから俺を見ていた。俺はその子に軽く笑顔を見せた、少女はとても嬉しそうに俺に笑顔を返してくれた。でも少女の笑顔とは別にその部屋には少女と別の声？叫びに満ちているように俺は聞こえた。

俺はその病室を通り過ぎて目的の病室に向かつていた。俺がその病室を見つけた時、病室から二人の男が出てきた。その二人の職業は何となくすぐに分かった、俺は通路の脇へ体を寄せ男達とすれ違つた。

「駄目ですねあれじゃ、息子さんを失つたショックでやられちゃっている」

「少女がかあ……」

二人組みの男は顔を曇らせぶつくさ言いながら去っていった。

「少女？」

俺は二人の姿が消えたのを確認して病室の中へと入った。

迎戸はまた薄暗い部屋の中で一人報告書などを見つめ、自身の頭を整理していた。

「引きちぎった様な痕があつたんだよ」

「引きちぎる……」

「ああ手形があつたんだよ。指紋もすっかりついていた」

迎戸は驚いた顔で上邊を見た。

「でも指紋はみんな死んだ人間のものです、それに指紋と手の大きさが一致しない、あの手の大きさは間違えなく子供なんだよ」

「……」

「上もこの情報は一部にしか流してない。このことが世間に流れればどうなるか分かるだろ、ただでさえ現場写真の流失で上は頭が痛い。全く世間は猟奇殺人だの解体屋だの言っているが、これは本当に人間のやったことか調べるほどこつちが疑いたくなるよ」

「人間じゃないか」

迎戸は奇怪を信じるような男じゃない、彼は以前にも説明出来ないような事件に出会っている。だからこそ今回は人間の仕業にしか思えなかった。そして何より五人目の被害者の違和感が引つかかる。短くなったタバコを灰皿に押し付け立ち上がった。

俺はバイトの日はよく遊夕堂に泊まることがある、たいていは六夜さんに頼まれて泊まる。今夜も六夜さんの頼みで泊まることになった。夕食はたいてい俺が作ることになる、魚の六夜さんはもちろん無理、伯は料理をしている所を見たことはない。夕食を二人分作り早めの風呂を済ませ、俺は缶チユウハイを片手に六夜さんと話し

ていた。伯は夕食を終えるとすぐに寝てしまっていた。俺は今日の仕事のことを大まかに説明した。

「一応、目撃者の話では犯人は少女だと言っていましたよ」

六夜さんは水槽の底に体を下ろしていた。

「あと伯は、五人目は違うって言ってました。でも俺にはすげーたくさん聞こえてましたけど」

「伯が言うなら間違いあるまい、五人目は模倣犯か何かなのだろ。やはり今回の奴は分からないな、殺人の動機、いや何故あんな殺し方をするかも」

俺はチュウハイを口に含み咽を潤した。

「バラバラの理由ですか？」

そうだよ、この手の猟奇殺人には必ず思い、悪意に近い何かがある。単にバラバラにするにも犯人は自身の個を示す、体の一部を盗んだり、並べたり、何かしらの個を示す。例外にそのこと事態に快感を覚える奴もいるが、その割には間隔や手段が適当すぎる」

「何も考えてないんじゃないですか？」

「四人目の現場に行った時はどうだった？」

俺は少し酔った頭を動かした。

「少しは聞こえましたけど、静かに感じたような？」

「悪意なき殺人か」

「悪意のない殺人があるんですか？バラバラにしているのに」

六夜さんは水槽の底から体を離し、静かに泳ぎ始めた。

「あくまで現場の状態からの推測だよ。お前は五人目の現場では五月蠅いほど聞こえたのだから？向こう側の奴らは少なからず思いや感情に反応する。それが殺人をするほどの思いものなら当然、それなりの興味を示す奴も多くいる。人間だって同じだろ、普通の事件じゃたいてい興味を示さないが、殺人ともなれば野次馬達が放っておきま

い」
「でも、四人目は静かだった」

「ますます手掛かりがなくなっちゃっよ」

ここでバイトを始めてもう少しで一年が経つ、最初の頃は色々驚いたり、信じられなかったりしたけど今ではこんな話もすんなり信じしてしまう。慣れの恐ろしさを痛感するなあ。

「嬉々、暫くここに泊まれ。深夜の見回りでもするか」

俺は軽くチュウハイを吐き出しそうになった。

「俺、これでも学生ですよ！！正直な話、去年はバイトで忙しかったりして単位あんまり取れてないし、今年ミスったら留年が」

「私は今までに強要したことはない、自己の責任だと思うが」

「いや、今回は無理です！！それにもし会っちゃったら俺、間違えなく殺されますよ！！」

「普段の二倍だそう」

「やります」

俺は反射的に答えていた、自身の命を簡単に売ったのだ。

「頼んだぞ」

そう言つて六夜さんはまた水槽の底へ体を下ろし静かになった。俺は店の隅のソファで寝ている伯に布団をかけ、青白く光る水槽の明かりを消し眠りについた。

〈 混念徘徊 3 / 4 〉

遊夕堂に泊まり始めて数週間がたった、大学には何とか出席だけを取りに行くことは出来ていた。毎晩、伯と二人で当てもなく町を回っていた。伯の奴は何か感じるのか一人でどこかへ行ってしまうことも度々あり、その度に俺は「今日はやめて」と祈っていた。

「これか」

伯はそれだけ言つてどこかへ消えてしまった。前に一度、伯を追いかけたこともあったがすぐに見失ってしまった。今日もいつも通り祈りを捧げつつなるべくひと気の多い所を目指していた。自身の後に迫る気配に気付くこともなく。

ひと気のない公園に数人の若者達がいた、彼らは目の前に広がる光景があまりにも不自然で信じることが出来ていなかった。若い男の腕は肩から綺麗に千切り取られ、男は自身の身に起こったことを正しく理解出来ていなかった。

「おい、腕が取れちゃったよ。すげー痛い、痛い!!!」

男は叫びと共に崩れ落ちる、仲間の内の一人が言った。

「解体屋だ、解体屋だよ、殺される」

仲間達は一斉に片腕の男を置いて逃げ出して行く。

「やめてくれ、たのむよ、お願いだから……」

片腕の男は痛みを忘れ何も答えぬ相手に言葉を投げかける。解体屋はただ男の片腕を握り締めそれを注意深く見つめる、それを更に二つに裂いて中を覗き込む。そして、無表情に男の片腕を投げ捨て、男へ近づいて行く。

「そいつをバラしても何も無いよ」

公園のベンチに腰掛けた伯が解体屋に話しかける。解体屋は伯を見つめる。

「お前が求めている何か、私なら持っているかもよ」

伯は凝った作りをした拳銃を構え、銃口を解体屋に向ける。

「磨姫路くん」

俺は突然聞こえた声に背筋を凍らせた、恐る恐る振り向くと知っている顔がいた。

「迎戸さん、驚かさないでくださいよ」

正直な話、薄暗い夜道の迎戸さんの顔はそれなりの怖さがあった。

「驚かす気はなかったよ、こんな時間に一人で歩いていると危ないよ。最近は色々ぶっそうだからね」

「そうですね」

俺はこの人の目が嫌いだ、今も身のない話をしながらも俺の反応を観察している。

「磨姫路くんは解体屋を知っているかい？」

俺は突然の話題に僅かに反応が遅れてしまった。

「まあ、人並み位には知っていますけど」

「人並みねえ、刑事の私がこんなことを言うのも難だが面白い噂があったね」

俺は迎戸さんの雰囲気の変化を感じていた、解体屋の名を出した時から確実に俺に何かを求めている。それが俺にとって良いことでないのはすぐに分かる。

「面白い噂ですか？俺は聞いたことはないですけど」

「実はね、解体屋の正体は子供だって噂があるんだよ」

迎戸さんの言葉に俺はふと先輩の母親が言っていたことが頭を過ぎる。

「えっ、子供ですか？」

俺は何とか自然に答えることが出来た。すると迎戸さんは一瞬、俺の顔をじつと見つめ笑い始めた。

「はっはっは・・・冗談だ。ちょっとからかったただだよ」

迎戸さんはそれから適当な話をすると別れ告げて、姿を消した。

「あの人と話すと神経が磨り減るなあ」

その時、銃声が鳴り響く。俺はとっさに人気のある方に走った。しかし、誰も銃声に気付いている様子はない。

「伯の奴」

俺は銃声の聞こえた方向と自身の感覚を信じて走りだした・・・

俺が目的地に着くまでに何発かの銃声が聞こえた。聞き取ることと感ずることに集中していた為に、正確な数は分からないがそれなりの数が放たれたはずである。

「伯！！！！」

俺が公園に着くとベンチにぐったりと伯が座っていた。公園は酷く荒れていた、飛び散った血液、破壊された遊具、何かの肉片などが目についた。

「大丈夫かよ」

伯は俺に気付き少し安心した様な表情だった。

「ああ、手を貸してくれ。少し無茶した」

伯の服は血に染まっていた。それが伯のものなのか、そも別のものであるのかは分からなかった。でも、ぐったりとした伯の姿を見る限り決して無傷でないことは十分に分かった。俺は伯に肩を貸した。

「伯、負けたのか？」

伯は俺を睨みつけて言った。

「誰にものを言っている。勝ったよ、まあ逃げられたがこいつの弾をあれだけくればもう長くはあるまい」

伯は自慢げに拳銃を俺の視界にチラつかせた。

「そうか」

俺の頭はこの時は伯への心配で一杯だった。まずは伯と共に遊夕堂へ戻ることになった。傷ついた伯に尋ねることには少し気が引かれたが、自身の気持ちに勝てず一つだけ尋ねた。

「なあ、解体屋ってどんな奴だったんだ？」

伯は俺を見て静かに言った。

「空っぽな奴さ、いや、だからこそ多くを受け入れてしまった。そして、より見失ってしまった」

俺はもつと違う答えが返って来ると思った。実際に返って来た言葉は深みと重みがあり、俺は正しい解釈が出来たか分からなかった。

でも、この答えがこの事件のすべてである事は何となく理解する事が出来た……

伯の傷は並みの人間なら十分に致命的であったが、伯自身が「暫く寝ていれば治る程度」と言うので、今は静かにいつものソファアールの上で眠っている。俺は六夜さんに伯から聞いた事をそのまま伝え、六夜さんはそれだけで十分だと言っていた。六夜さんは探偵や便利屋ではない、この人？は探求者だ。自身の知らないことをただ求める。今回の事件も犯人への興味と好奇心で動いたのだらう。ま

あ、実際に動いたのは俺達なんだが。

「空っぽか、だから人間の体に個の証明を求めた」

六夜さんは魚の頭で考えている、俺は静かに缶チューハイを片手にそれを眺めていた。

「六夜さん、結局、犯人はどんな奴なんですか？」

「面白いことは聞くな、お前なら分かっているだろ。この中で一番犯人の手掛かりを知っているのはお前さんだよ」

六夜さんの言葉に、俺の頭を一つの答えが過ぎる。

「伯の弾をくらっているようだが、明日まではもつだろう」

「明日は出かけてきます」

六夜さんは少し笑って？眠りについた。

） 混念徘徊 4 / 4 ）

俺はまたこの病院の前に立っていた。昨日の会話から俺の答えは出ていた、自身の導いた答えは明らかにかつての自身では信じられないものだった。でも、今の自分ではこれが答えである事を確信している。

俺は静かに扉を開けた、病室の中はとても静かで生物的な音はない。病室の窓の近くに一つのベッドがあった、小さな人形のような女の子が窓の外を静かに見ていた。少女に近づくにつれてそれは聞こえた、少女から聞こえる複数の声、いや今は叫びのようにも聞こえた。少女は俺の方を向いた、その姿は儂く今にでも折れてしまいそうだった。

「初めまして」

「こちらこそ」

「退屈な部屋ですいません、どうぞ座ってください」

少女から聞こえる声に比べて、少女自身の声は弱々しく儂かった

「ありがとう」

「今日は何だか気分がすごくいいの、普段はこんなに口が動いてく

れないから」

俺は黙って彼女の話聞いた、彼女にとって最後の話し相手が俺に成るかもしれないと思うと、考え過ぎて言葉うまく出なかった。

「私ね、あなたのこと知っていたのよ。半年位前までよく病院に来ていたでしょ？時々見かけてね、いつも綺麗な花を持って歩いていた」

そう、俺は半年前まではよく病院に来ていた。毎回、見てもらえるわけもない綺麗な花を持って。

「見られていたのか」

少女はクスクスと笑っていた。

「その人は今は元気ですか？」

「ああ、元気さ。君より少し年上の妹がいたんだ」

「妹さんが羨ましいな、こんな優しいお兄さんがいてくれて」

少女はゆつくりと視線を俺から外して窓の外を見る、その悲しそうな姿が何故かすごく絵になっていた。

「優しいお兄さんか…」

俺は少女と一緒に窓の外を視線を向けた。

「私には何もないの、家族も友達もなにも。私のこの命も本当は私のモノじゃないの、だから私は何もない。空っぽの入れ物…」

俺はこの子に何も言えなかった。この子は理解している、自身のことを誰よりも。だから、俺はこの子に会うことになった。利巧である為、あまりにも自身のことを考える時間ときがあった為に、彼女は自身の存在の証明を聞いた、そして存在の証明を求めた。

「きつともう少しで私は消えてしまっ、やっぱりこう言うことって自分が一番よく分かるみたい。お医者さんに今朝とても元気って言われたけど、もうダメだって分かる。これが最後に神様が、私にくれたご褒美なのかなって」

少女は俺に微笑む、俺はその顔がとても悲しく、切なく、俺にのし掛かる。

「私の所には誰も来てくれない、いつも一人で外を眺めていた。で

も、私は今気付いてもらえた、私がおりにいること知ってもらえた。私の存在はここにあったんだって」

少女の手が俺の顔に触れた、冷たく細い指がそつと顔を撫でた。

「お兄さん、泣いているよ」

「ごめんな、俺はまた何も出来ない……」

少女は俺の頭に触れて言った。

「私が許してあげる」

俺は何をここに求めて来たのだろうか、ただ何も言えずに、何も出
来ずに俺はここに来た。自身の心が答えではなく、許しと解放を求
め……

俺は少女と約束をして、遊夕堂へ戻った。六夜さんは俺の帰りを
待っているように水槽の中から入り口を見つめていた。俺は水槽に
近づき近くの椅子に腰を下ろした。

「どうだったい？」

「六夜さんと伯の言っていることが分かりました」

六夜さんは静かに水槽の中を泳ぎ始めた。

「人間の存在の証明は自身のみでは見つけられない。もし世界で
自分一人ならば個は種でしかない、種は個ではない。少女は自身の
証明が欲しかった、だから無意識下に人間の個の証明を求め、それ
を探し、人をバラし、そして多くを意識に飲み込んだ」

「きつかけは？」

「その子は心臓の移植を受けている。そして、最初の事件の起きる
数ヶ月前に事故にあつて輸血を受けている。嬉々、人間の心はどこ
にある？」

俺はそつと自身の胸に手を当てていた。

「そこもそうだ、私はね。体のすべてに心が宿っていると考えてい
る、だから健全体に健全な精神とかはあながち間違っていないと思
う。体のすべてに少なからず心は宿る。人間は自身の一つの心も制
御出来ない。それなのに一つの体、まして常人より弱い体に複数の

心が宿つてみる。心は混じり、ただの塊となる。今回は少女の強い思い引きずられ、少女の求める解^{もの}為に徘徊した」

その時、後からから伯の声が聞こえた。「存在の証明は自身で見つけるものじゃない、他人から与えられるものさ」

あの子にはそれを与えられる者がいなかった、それがこの事件の根本的な原因でしかない。そして、俺はその原因を何度も拭うことが出来た。

俺は翌日、両手一杯の花を持って少女のもとを訪れた。

そこには何も聞こえない病室が俺を待っているだけだった……

混念徘徊 終

次章予告

これは出会いと別れの物語。

夢を見続ける虚はただ彷徨う、覚めれば終わってしまうう夢き夢。

第二章 夢想^{むせう}渴^{かつ}虚^こ

「覚めれば終わり、夢は夢、続きなん

て見れやしないよ」

第一章 混念徘徊（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

まず最初にこの第一章では二番目の時系列の作品です、その為に色々謎が残されているのは了承ください。

この作品は自身が好きなジャンルの作品です。その為に、自身の好きな作品に似てしまわないように書くのがとても大変でした。

書きたいことはたくさんあるのですが、早く皆さんに届けたいのでこの辺りで、活動報告あたりでまた。

次章の投稿なにも活動報告で連絡いたします。

最後に、読んでくださった方へ。

貧しい文章でありましたが、最後までお付き合いくださりありがとうございます。ありがとうございます。

廻間章 遊の二夜（前書き）

こんにちは。

だいぶ期間が空いてしまいすいませんでした。今回は間章です、短い文章ですがよろしく願います。

列のズレなどは後日修正いたします。

携帯からの方は読みずらくてすいません。

廻間章 遊の二夜

かんしょう
廻間章 遊の二夜

真つ白な病室の中、少女は薄れ行く意識の中で、病室の窓から病院の入り口を嬉しそうに眺めていた。終わり逝く自身の時間をしっかりと感じ取りながらも。

「もう時間ね、お兄ちゃんとの約束守れなかったな」

少女は自身の運命を受け止め理解していた。小さな花は綺麗に咲くこともなく枯れて逝く、それはとても静かにひっそりと……

真つ白な病室に不釣り合いな暗い影は、そつと少女のもとに小さな花を置いた。

「不思議な名前だ、この子はこんなにも人との出会いを求めているのにな」

影が去ると共に、病室はより静かになっていた。

そして病室から繁会 心音の名は消えた……………

〈華終の美隷〉

花は静かに咲く 誰かに訴えることもなく
……………それは彼らが知っているからかもしれない……………

気が付かれない 知ってもらいた 私を見て そう訴えるそのときが

……………一番美しいことを……………

……………そして終わりに向かう ことであることも……………

俺は必要なくなつた花達を遊夕堂ゆうじゆうどうに飾っていた、適当に落ちていた壺を花瓶代わりに花は優しくこの店を彩った。

「お前が花を買ってくるとは、どういう風の吹き回しだ」

六夜ろくよさんは水槽をゆっくりと泳いでいた。俺はあまり話したくない気分だったが、雇い主様の言葉を無視するほどの人間でもない。

「そうですね？俺、けっこう花とか好きなんですよ」

俺は六夜さんに明るい声で答えた、六夜さんは少し俺を見て笑っていた。

「お前さんは本当に分かりやすいな」

六夜さんは水槽の中でぶかぶかと浮きながら俺を見ている。

「何がですか？俺はいつも通りですよ」

「確かにいつも通りと言えば、いつも通りかね。私はこれでもお前よりかなり長く生きている、その分多くを見てきた。その中でもお前さんは飛び切り素直な奴だよ」

俺はその言葉をどう受け入れていいのか分からなかった、俺は水槽の奥に映る自分を見ていた。

「俺、そんなに酷い顔していますか？」

「はっはっ……お前って奴は本当に。ちよつとそこにある封筒を開けてみる」

俺は机の上に広がった資料や郵便物の中にあつた封筒を手にした。

「これですか？」

「そうですね、今日は宴会でもしよう。金はその封筒の中のものを使つていいぞ」

封筒の中のたくさんの諭吉と目があつた、俺は彼らを封筒に戻し六夜さんを見た。

「いい職場だろ、しっかりと従業員のメンタルケアを怠らないのが一流の店主さ」

六夜さんは体を揺り動かし泳ぎ回る。

「何かすいませんね、六夜さん」

「気にしてもいいぞ、恩を感じてくれると嬉しいくらいだよ」

俺は六夜さんの言葉に表情と心が和らぐ、この人？は本当にいい人だと感謝してしまう。それは手に握られた諭吉くん達のせいでもなく、単純にこの人のこう言う所が好きだった。俺はこんなことを考えながら、六夜さんを見つめていた。

「嘘だよ、うっそ。そんなに真に受けないの、ほら買出しよろしく！！」

「ありがとうございます、海老たくさん買ってきます！！」

「おう、あと蟹とかもよろしく頼む」

「まったく世話がかかる子だね、だから可愛いだけだね」

部屋の奥から艶やか声が聞こえる、その声の主はぐったりと水槽の近くの椅子に座った。

「まだ産まれたばかりみたいなものだからな」

^{はく}伯は無表情に口を開く。

「産まれたばかりか、確かに私達と比べればそんな所か。体はもういいのか？」

「まあまあって所、あんまり寝ているとあいつが心配するからな」

「それならさつき起きてくればいいことを」

伯は長い髪を眠そうに触りながら、そつと花瓶の花に目をやる。

「この店に花があるなんてのは何年ぶりだろうな」

「何十年かもしれないね」

二人は静かに花を見つめる。その命は短く、彼らにとってはほんの一瞬のことかもしれない、それでも彼らにとっては変化なき世界の小さな変化だった。

「伯、生き物を見て、美しいと思うのは何年ぶりだろうね」

「長すぎると多くのことに気付かなくなってしまうな」

その日の夜は色々な話をした、普段はあまり喋らない伯も酒のせいかよく話した。二人の昔話、俺の小さい頃話、六夜さんの青春話までたくさんのお話を話した。俺はまた他人に許しと解放を求めている

たのかもしれない。俺は酔いを醒ます為に店の屋上にいた。よく晴れた夜空は月明かりで明るく、夜風が気持ちよく吹き抜けた。

「いい風だな」

後から伯の声が聞こえた、伯は俺の隣に座り込んだ。俺は少し驚いていた、伯は基本的に俺にあまり関わらない。時々俺をいじって遊んだりするが、それも単発的なことでこんなに話したのも初めてな気がする。

「そうだな」

俺は正直な話、かなり緊張していた。酔いのせいもあるかもしれないが、普段に比べて伯の姿が魅力的でどうもすっかりと見る事も出来ない。もちろん話を続けることなど出来なかった。

「嬉々也、お前は色々考えすぎだ。確かに年のわりには色々経験しているかもしれない、でも今は過去ばかり見ていて年でもない」伯の言いたいことはすぐよく分かった、俺は簡単に忘れられない人間だと思う。過去を引きずりその重さで中々前に進むことが、もう出来なくなってしまうのかもしれない。

「伯は俺より遥かに長く生きているんだろ？それなら・・・」

「嬉々也、お前が私に聞きたいことはだいたい想像がつく。まず私とお前は別物だ、だから自分で考える。もしここで私がお前に何かを与えたら、お前は確実にまた自分を責めるだろ。私はかまわないが、六夜の奴はお前を気に入っている。だから心配をあまりかけなな」

伯の言葉はすごく優しく聞こえた、本当は厳しい言葉だったのかもしれない。

「俺は駄目だな」

「ああ、駄目な奴だよ。でもそこが可愛いところだよ」

その時、夜風が優しく吹きぬける。風に乗って聞こえてくる多くの声達、その一つ一つが俺に語りかけてくるようだった・・・伯はそつと俺を見て笑う、その笑顔は綺麗で俺には重かった。

「嬉々也、お前がどんな道を歩くのも自由だ。でもな一度歩いた道

を私達はもう歩けない」

伯の言葉は正しい、俺は何度も何度も同じ道を戻りたいと思っている。過去に選んだ道の正誤を自身に問い続けている。

伯は静かに立ち上がり、店の中へ戻って行った。

「伯、過去は俺を許してくれるのか？」

伯は振り返り、冷たく言う。

「私にも分らないよ」

俺はまた他人に逃げた、許しを解放を求めて。俺は情けなくて何も言えなかった、伯に何も答えを返せなかった。この時の伯の表情はいつものモノとは違った、きつと彼女自身もこの答えを求めているのかもしれないと俺は思った。

伯は店の中へ姿を消す、俺はその場に倒れ込み夜空を見上げた。

「夢花・・・・・・・・・・・・・・・・」

この話を振り返るのはこれを最後にしよう・・・

それは半年ほど前の出来事、忘れられない12月

それは寒い日のことだった・・・・・・・・

第二章

夢想渴虚^{むせうがくきょ}

年内投稿予定

廻間章 遊の二夜（後書き）

最後までありがとうございます。

第二章の投稿まではまた期間が空いてしまいそうです、正確な時期が決まりましたら活動報告にて連絡する予定です。

これからもよろしければこの物語にお付き合いお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1696/>

遊曲の直線 Boundary of the deceased and there

2011年10月6日17時37分発行